

大学英語授業での評価における TEAP プレイACEMENTテスト（仮称）の活用—TOEFL®対策授業に焦点を当てて

<概要>

本研究では、TEAP プレイACEMENTテスト（仮称）を大学英語授業での評価に活用する可能性を検証する。特に、TOEFL®対策授業に焦点を当て、評価で活用する際の方法や留意点、および今後の課題を考察する。

<はじめに>

日本英語検定協会（2022）によると、TEAP とは、大学の授業や学習で取り上げられるような話題および内容を英語で理解したり表現したりする力を測定するテストである。大学教育で遭遇する語彙・場面・分

野を想定した内容に特化しているため、留学のための英語力証明となるテストへの橋渡しとしての役割を担うことが期待されている。本研究では、この TEAP に基づいて作成された TEAP プレイACEMENTテスト（仮称）の結果を、留学の際に広く利用されている TOEFL®対策の授業における評価に活用できるかどうかを検証する。また、テストの結果を教師の授業改善に役立てるための方法も考察する。最後に、今後の課題として、学生がテストを受検した後に、提供されることを期待するフィードバックについて提案する。

表1 TEAP と TOEFL®の問題構成（Reading）

	TEAP	TOEFL®
問題数	60 問	3 または 4 パッセージ（各 10 問）
内容	<ul style="list-style-type: none">・大学での授業や資料・文献などを理解する上で必要とされるアカデミックな語彙力・授業や資料・文献などにおける視覚情報の理解とそれに基づく類推・学業に関わる掲示・Eメールなどにおける情報の理解・教材や資料・文献などにおけるパラグラフ単位の英文理解教材や資料・文献などにおける英文の文脈や論理の流れの理解・教材や資料・文献などにおける英文の詳細理解(図表も含む)	アカデミックな長文読解問題（1 パッセージ約 700 語）から自然科学、社会科学、芸術など幅広い分野の教養科目を題材に出題
時間	70 分	54～72 分

表2 TEAP と TOEFL®の問題構成（Listening）

	TEAP	TOEFL®
問題数	50 問	【講義】3 または 4 題（各 6 問） 【会話】2 または 3 題（各 5 問）
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・学生として遭遇する可能性の高い相手とのやりとりの聞き取り(例：教授、アカデミック・アドバイザー、留学生など) ・講義(ミニ・レクチャー)や報道情報などの聞き取り ・図表の理解と組み合わせた英文の聞き取り ・学生として遭遇する可能性の高い相手とのやりとりの聞き取り(例：教授、アカデミック・アドバイザー、留学生など)※2 者間だけでなく、3 者間のやりとりも含む ・授業・講義などの聞き取り(図表も含む) 	<ul style="list-style-type: none"> ・講義と会話の 2 種類で構成 ・幅広い分野の教養科目を題材とした講義(3～5 分) ・教授と学生、大学職員と学生、学生同士などの会話（約 3 分）
時間	約 50 分	41～57 分

<研究課題>

日本英語検定協会（2022）と ETS Japan（2023）によると、TEAP および TOEFL® の Reading と Listening の問題構成は表 1、2 のとおりである。どちらもアカデミックな場面での英語運用能力を測定しており、内容面で重なりがあることがわかる。

なお、学力の測定以外にも、テストが有する重要な機能としては、教師の授業改善と学生の動機づけの向上がある（静、2002；若林・根岸、1993）。したがって本研究では、英語力の測定、教師の授業改善、学生の動機づけの向上という 3 つの観点から、TEAP プレイスメントテスト（仮称）を大学英語授業での評価において活用できるかどうかを検証する。具体的には、テストを TOEFL® 対策の授業内で実施して、スコアと学生への事後アンケート結果を分析することによ

って、より良い活用方法を探ることを目的としている。本研究の研究課題は下記のとおりである。

- 1) TEAP プレイスメントテスト（仮称）を学生の評価に活用する際には、どのような留意点があるか
- 2) TEAP プレイスメントテスト（仮称）を教師の授業改善に役立てるためには、どうすればよいか
- 3) TEAP プレイスメントテスト（仮称）を受検した後に、学生はどのような情報提供を期待しているか

<研究方法>

日本の私立大学において、TOEFL®対策を主目的とした授業を研究対象とした。本授業は 2022 年度後期（9 月～1 月）に開講され、全部で 15 回の授業が行われた。第 3

回目と第 14 回目の授業中に TEAP プレイメントテスト（仮称）を実施した。学生には、テストの結果は授業の成績には反映しないことを伝えた上で、テストの概要を紹介し、TOEFL®対策の授業中に実施することの意義を説明した。1 回目と 2 回目のテスト問題は異なるが、難易度は同程度になるように調整されていた。各テスト後には学生個人の Reading および Listening の点数と、CEFR レベル（Below A1～C2）が伝えられた。したがって、テストを 2 回受検した場合、学生は 1 回目から 2 回目にかけて自分の Reading および Listening の点数と、CEFR レベルがどのくらい変化したかを知ることができた。

2 回目のテスト結果返却時には「2 回のテストの結果を比べて、結果が変化した（あるいは変化しなかった）原因として思い当たること」と「テストの結果を自分の英語学習に役立てるために、受検後にはどのようなデータが提供されることを期待するか」を尋ねるアンケート調査を実施した。なお、2 回のテストの両方に参加した学生は 19 名であり、その中で 2 回目のテスト結果返却時のアンケートに回答した学生は 14 名であった。

授業は TOEFL®対策の教科書を活用して行われた。毎回（90 分）の授業の大まかな流れは表 3 のとおりである。

表 3 各授業の時間と内容

時間	内容
5 分	出席確認
10 分	新出単語の学習
20 分	Reading の学習
20 分	Listening の学習
20 分	Speaking または Writing の学習
10 分	小テスト
5 分	まとめ

毎回の授業で 1 つの Unit を扱った。新出単語は毎回 10 語であり、英単語と日本語の意味を正しく結び付ける問題であった。Reading と Listening では、TOEFL®形式の問題をそれぞれ 1～2 問学習した。教師が設定した時間内で学生は問題に取り組み、教師が解答と解説を行った。Speaking と Writing は隔回で交互に学習した。どちらも TOEFL®形式の問題であり、Independent タスクと Integrated タスクの両方を扱った。小テストは新出単語だけでなく、Unit 内に出現した単語を問う問題を 15 問出題した。

<結果と考察>

研究課題 1 に答えるために、表 4 のとおり 1 回目 (①) と 2 回目 (②) の結果を比較して、スコアについては差を算出した (② - ①)。2 回のテストにおける平均値の差を有意水準 5% で両側検定の t 検定 (対応あり) により検討した。その結果、Reading は $t(18) = -0.14$, $p = 0.89$, $n.s.$ 、Listening は $t(18) = -0.44$, $p = 0.66$, $n.s.$ であり、これらの平均値の差は有意ではなかった。

表4 テスト結果の比較

学生	Reading						Listening					
	スコア			CEFR			スコア			CEFR		
	①	②	差	①	②	変化	①	②	差	①	②	変化
A	32	49	17	A1	A2	上昇	35	41	6	A2	A2	なし
B	40	35	-5	A2	A2	なし	51	39	-12	A2	A2	なし
C	44	35	-9	A2	A2	なし	35	25	-10	A2	A1	下降
D	32	38	6	A1	A2	上昇	51	41	-10	A2	A2	なし
E	40	30	-10	A2	A1	下降	41	32	-9	A2	A1	下降
F	35	47	12	A2	A2	なし	35	32	-3	A2	A1	下降
G	35	33	-2	A2	A1	下降	35	32	-3	A2	A1	下降
H	44	40	-4	A2	A2	なし	46	46	0	A2	A2	なし
I	42	40	-2	A2	A2	なし	32	49	17	A1	A2	上昇
J	32	30	-2	A1	A1	なし	32	36	4	A1	A2	上昇
K	40	38	-2	A2	A2	なし	38	41	3	A2	A2	なし
L	25	56	31	A1	B1	上昇	38	41	3	A2	A2	なし
M	56	40	-16	B1	A2	下降	41	49	8	A2	A2	なし
N	32	30	-2	A1	A1	なし	24	39	15	-A1	A2	上昇
O	35	49	14	A2	A2	なし	48	44	-4	A2	A2	なし
P	49	38	-11	A2	A2	なし	43	56	13	A2	B1	上昇
Q	37	35	-2	A2	A2	なし	28	20	-8	A1	-A1	なし
R	40	33	-7	A2	A1	下降	43	44	1	A2	A2	なし
S	29	30	1	A1	A1	上昇	38	44	6	A2	A2	なし
<i>M</i>	37.8	38.2	—	—	—	—	38.6	39.5	—	—	—	—
<i>SD</i>	7.15	7.22	—	—	—	—	7.13	8.39	—	—	—	—

注. CEFR の -A1 は Below A1 を示す

個々の学生における点数の増減を見ると、Reading では、最大で 31 点上昇した学生がいた（学生 L）一方で、16 点下降した学生もいた（学生 M）。Listening では、最大で 17 点上昇した学生がいた（学生 I）一方で、12 点下降した学生もいた（学生 B）。ただし、CEFR の変化を見ると、Reading では 2

点の下降で A2 から A1 に下降した学生がいた（学生 G）一方で、14 点の上昇でも変化しない学生もいた（学生 O）。同様に、Listening でも 3 点の下降で A2 から A1 に下降した学生がいた（学生 F、学生 G）一方で、12 点の下降でも変化しない学生もいた（学生 B）。したがって、学生の英語力の変

化を評価する際には、点数の増減を活用するか、CEFR の変化を活用するかは検討する必要があるだろう。

2 回のテスト結果における変化の原因を尋ねたアンケートでは、下記のように点数が上がった理由として授業での取り組みを挙げている学生がいた（以降の学生のコメントは原文のまま掲載している）。

- ・学校の授業のおかげで点数が上がったんだと思います。（学生 A）
- ・Listening は、1 回目よりは聞きとれるようになり、それが結果となりよかった。週 1 でもいいから英語を聞くことで耳がなれたと感じた。（学生 I）
- ・大学での TOEFL 授業によって知識が身に付いたと感じた。（学生 N）

したがって、本テストの結果は、授業での取り組みを評価する参考資料になりうるだろう。しかしながら、テストの結果を評価に活用する際は、結果の変化には授業での取り組み以外の要因の影響があることも考慮しなくてはならない。授業以外の要因による点数の上昇に言及したコメントは下記のとおりである。

- ・前は寝不足で途中でウトウトしてしまっていたが、今回は体調が良かった。また、授業で扱った単語が多く出てきたと感じた。（学生 L）
- ・リスニングはまぐれで当たったものばかりなので安定して取れるようになりたい。（学生 M）

したがって、本テストでは扱わない技能である Speaking や Writing のパフォーマンス評価を含む他の方法での形成的評価や総合的評価を利用して、学生の英語力を総合的かつ多面的に評価することが必要であろう。

研究課題 2 について、Reading も Listening も平均点の上昇が統計的には有意にならなかったことや、個々の学生における点数の増減にばらつきが見られたことを受けて、本テストの結果を今後の授業改善に活かすことが重要である。ただし、各問題のテストポイントや正答率等の詳細な情報は提供されないため、テストの結果だけから具体的な授業改善の方策を見出すことは難しい。そこで、2 回のテスト結果における変化の原因を尋ねたアンケートに対する、下記のような学生からのコメントを利用した授業改善の例を挙げる。

- ・1 回目の時よりも時間を気にしすぎてしまい焦ってしまったと思う。その為前回より低い点数になってしまった。（学生 B）
- ・授業内だけの勉強で、授業外の勉強をせずにテストを受けてしまったこと。（学生 H）
- ・Reading が変化なかったのは、まだ単語がわからなかったり、しっかりと頭に入っていないからだと思う。そのため、もっと単語力を上げれば点数が高くなるのではないかと感じた。（学生 I）
- ・時間配分がうまくできず Reading に関しては最後の長文に時間をかけることができなかったので下がったと思う。（学生 M）
- ・リーディングが 10 点近く下がった。普段の生活で英語を聴くことは多いが、文を構

成ることがないのが原因の 1 つなのかと思った。(学生 P)

・結果はそれほど変わらず、同程度だった。復習や時間配分がだめだった。(学生 Q)

・リーディングが 7 点下がった。前回よりも長文の部分でわからない単語が多く、文章の理解ができなかった。(学生 R)

これらのコメントは点数が下がった学生から得られたものなので、ここから 3 点の授業改善方策を見出すことができる。1 点目は、学生が自分で時間配分を考えて問題を解く機会の不足である。授業では大問ごとに教師が時間を設定して問題に取り組ませていたが、1 問ごとではなく、3~4 問をまとめて長い時間を設定して問題を解かせることも重要である。学生が問題全体を眺めた上で、自ら時間を配分して解く習慣を身につけさせるような指導が、テストの点数向上には必要であるとわかった。

2 点目は語彙力を強化する機会の拡充である。授業では最初と最後に語彙に焦点を当てた活動と小テストを実施していた。ただし、どちらも単語の意味に集中した活動であった。しかしながら、語彙の知識は複数の側面から構成されており、適切な使用のためには、語彙の幅だけでなく深さも必要であると言われている (Nation, 2001)。そこで、今後は単語の意味だけでなく、その同意語や反意語、語法や用法も含む複数の側面から総合的に語彙力を増強していくことが必要であるとわかった。

3 点目は、授業外での学習の促進である。授業時間だけでは、学習できる内容には限りがある。そこで、授業外での学習をさらに

促す必要性を感じた。特に、授業の復習だけでなく、授業の中では扱っていた Speaking と Writing の活動や、TOEFL® で必要となる学術語彙の学習を授業外学習として課すことが必要であるとわかった。

このように、テストの結果だけでなく、アンケートやインタビューを通して学生の声を集めることによって、授業改善につながる可能性を見出すことができた。

最後に、研究課題 3 について、学生はテスト後にどのような情報を提供されることを期待しているかを検討する。フィードバックについての学生のコメントは下記のとおりである。

・どの部分が間違っていて、あっているのかという様なデータがあると自分自身の弱い所がわかるかなと思う。単語選択の部分なのか長文の部分なのかのように大きな部類でいいので知れたら勉強しやすいと思う。

(学生 B)

・問題の解答。(学生 C)

・推定単語力、苦手な文法などの分析。点が伸びた人のデータ。(学生 G)

・Reading、Listening それぞれどのようなところを間違えてしまったのか、そして自分はこういったことを勉強していけばいいのか分かったらもう少し結果が上がるのではないかと思った。(学生 H)

・覚えた方がよい文法や単語などのデータ。(学生 K)

・勉強のやり方や参考書などの紹介があったら良いと思った。(学生 L)

・どこを間違えたのか 1 つずつ開示してほしいと思う。または間違えてはいけない基

礎的部分も分かるとありがたいです。(学生 M)

- ・全体の正答率が高いのに、自分が間違えてしまった問題の開示。間違いに基づき、どこを重点的に勉強したら良いか。(学生 N)
- ・どの問題にどれほど時間をかけていたか知りたい。(学生 Q)

本テストは複数の大学での実施が想定されているため、問題、解答や解説、テストポイント等について教師や学生に提供できる情報には限りがあるだろう。しかしながら、学生からのコメントにあるように、個々の学生が今後の学習につながられるようなフィードバックが提供されることが望ましい。授業時間内に実施するテストとして、テスト受検時の英語力を測定するだけでなく、テストを受けた学生の英語学習に対する動機づけの向上に貢献し、より授業内外の学習に意欲的に取り組めるようなフィードバックがあれば、授業における活用も広がるであろう。

<結論と今後の課題>

本研究では、TEAP プレイスメントテスト（仮称）を大学英語授業における評価に活用する可能性について検証した。TEAP と TOEFL®の関連性から、TEAP プレイスメントテスト（仮称）は TOEFL®対策授業において学生を評価するための参考資料になりうることを確認できた。ただし、他の方法を用いた形成的評価や総括的評価の重要性も示唆された。次に、学生へのアンケート調査を併用することにより、テストの結果を授業改善に役立てられることが示された。

本研究では、時間配分のトレーニング、語彙力の増強、授業外での学習の促進の3点が改善点として挙げられた。最後に、今後の課題として、学生のコメントから、テスト後のフィードバックとして提供が期待される情報を明らかにした。スコアと CEFR レベルだけでなく、受検後の学習に役立つ情報や資料が提供されることによって、本テストはさらに学生の動機づけの向上に貢献するであろう。本研究の結果が、TEAP プレイスメントテスト（仮称）の発展と普及に少しでも貢献できれば幸いである。

<参考文献>

- ETS Japan (2023). 「特徴・構成・料金」
https://www.toefl-ibt.jp/test_takers/toefl_ibt/advantages.html (2023年3月7日参照)
- Nation, I. S. P. (2001). *Learning vocabulary in another language*. Cambridge University Press.
- 日本英語検定協会(2022). 2022年度 TEAP 説明資料.
- 静哲人 (2002). 『英語テスト作成の達人マニュアル』大修館書店.
- 若林俊輔・根岸雅史 (1993). 『無責任なテストが「落ちこぼれ」を作る』大修館書店.